

【原 著】

「学生オペラ」を通じた文化活動の推進 (2)
—教員と学生の内的評価の分析を中心に—

虫明 眞砂子 小川 容子 早川 倫子

Leading Cultural Activity through Student Opera (2)
: Analysis of the Internal Evaluation of a Teacher and Student

Masako MUSHIAKI , Yoko OGAWA , Rinko HAYAKAWA

2013

岡山大学教師教育開発センター紀要 第3号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.3, March 2013

原 著

「学生オペラ」を通じた文化活動の推進 (2)

— 教員と学生の内的評価の分析を中心に —

虫明 眞砂子^{*1} 小川 容子^{*2} 早川 倫子^{*3}

要旨: 「学生オペラ」の発信は、教育現場で活躍できる人材育成と、岡山大学を文化活動の拠点とした文化・芸術活動の盛んな地域づくりを目指すことを目的として実施したものである。本稿では、(1)に引き続き、その取り組みの意義と課題について、教員(指導者)と学生の内的評価の分析を中心に考察を行った。学生対象のアンケート結果からは、全体の88%の学生が参加してよかったと感じており、また、教員養成におけるオペラ活動の意義を良い経験であると感じている学生は97%であった。大半の学生が、オペラのような総合的且つ横断的な分野の経験は、教育現場で活用でき、協調性や自主性を伸ばすことにもつながると考えており、活動の意義を共有していることがわかった。教員(指導者)のアンケート結果からは、それぞれの役割を發揮できたという連携の意義と、物理的体制の強化について課題が確認された。

キーワード: 学生オペラ, 人材育成, 連携, 文化活動の拠点づくり, 内的評価

※1 虫明 眞砂子 (岡山大学大学院教育学研究科)

※2 小川 容子 (岡山大学大学院教育学研究科)

※3 早川 倫子 (岡山大学大学院教育学研究科)

I. はじめに

本稿では、「学生オペラの発信の取り組みの意義と課題(1)」に引き続き、「学生オペラ」を通して取り組んだ教育活動の意義と課題について報告をする。

教員養成に関わる大きな変革の時代の背景を受け、筆者らは教員の資質向上の一助として、高度な教科専門力と教育現場で求められる実践力・指導力を兼ね備えた学生輩出を目的に、「学生オペラ」に取り組んだ。既に報告したように(1)では、「学生オペラ」本番までの約半年間に及んだ準備期間の様子とその成果に焦点をあてると共に、私たちが取り組んださまざまな連携のあり方と課題について述べた。また、終演後に実施した附属学校の児童・生徒と、一般観客を対象としたアンケートの結果について、考察・検討をおこなった。

本稿では、さらに、この取り組みに関わった学生と教員(指導者)を対象に実施したアンケート調査の結果を中心に、報告をおこなう。

II. 「学生オペラ」に取り組んだ学生へのアンケート

1. 調査の概要

定期演奏会終了後に、4部門: キャスト(11名), 合唱(11名), オーケストラ(賛助除く8名), スタッ

フ(5名)の計35名を対象に、オペラハイライト《フィガロの結婚》に関するアンケート調査を実施した。内訳は次の通りである(2名が未提出)。

性別: 男6名, 女27名, 計33名。

学年: 1年生11名, 2年生5名, 3年生6名, 4年生3名, 大学院生以上8名。

調査期間: 平成22年12月17日～12月22日

アンケート調査の質問項目は、以下の通りである。

<p>性別: 男・女</p> <p>年齢: 1.1年生 2.2年生 3.3年生 4.4年生 5.大学院生以上</p> <p>参加分野: 1.キャスト 2.合唱(花娘) 3.オーケストラ 4.スタッフ</p> <p>1. オペラハイライトに参加したあなたご自身の印象はいかがでしたか。()には、意見を記入してください。</p> <p>①とてもよかった ②まあよかった ③普通 ④よくなかった ⑤わからない</p> <p>()</p> <p>2. 今回のオペラハイライトの参加する前後でご自身に変化がありましたか? 具体的に記入してください。スタッフは③④に記入してください。</p> <p>①演奏面 ②演技面 ③オペラ制作の経験(約半年間の流れ)を通じた変化 ④ その他(今回の経験で強く感じたことなどを書いてください)</p> <p>3. あなたは教育学部の教育活動の一環として、オペラのように演技や歌唱、歌唱、大道具・小道具、照明などさまざまな要素を含む表現活動を実施することをどのように考えますか。()に、その理由を記述してください。</p> <p>①とても良い経験である ②まあよい経験である ③教員養成学部には不向きである ④わからない</p> <p>()</p> <p>4. 今回の経験を通して、課題と思った点はなんですか? 自分自身や全体に対して、自由に書いてください。</p>

()
 5. このような機会があれば、参加したいですか？
 ①ぜひ参加したい ②参加したい ③参加したくない ④わからない

2. 調査結果

①参加した印象について

内容	キャスト	合唱	オケ	スタッフ	計	%
とてもよかった	8	7	4	1	20	61
まあよかった	3	3	2	1	9	27
普通			1	1	2	6
よくなかった				1	1	3
わからない				1	1	3

	<p>オペラを通して色々な面で得るものが多かったと思う。練習していく中で、他の出演者の方との絆も深まって良かった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ソロあるいは数名でのアンサンブルも楽しいが、大勢での音楽づくりは、大変だが、より大きいものをつくることができ、公演を終えて、充実した気持ちでいっぱいだった。
スタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・オペラ練習に参加できる日が少なかった。 ・初めてオペラの裏方に参加しましたが、意外と楽しめました。 ・今まで何度かオペラハイライト、ミュージカルのスタッフをさせていただきましたが、今年は例年になく、学生主体で創り上げるステージで運営などとても勉強になりました。

②参加前後の自分自身の変化

	内容
キャスト	<ul style="list-style-type: none"> ・初めてオペラというものに携わって、学生同士が協力して一つのを創り上げるという大きな達成感を味わう経験ができて、とても充実感を感じることができた。 ・すごくよい経験になった。 ・配役決定の段階から本番まで大きく成長できたので、一生懸命取り組んでいたのだと思う。 ・最初はどうなるかという不安もありましたが、やはり終えてみると参加できてよかった。 ・とても楽しかった。どんどん全体の演奏や演技がよくなっていくのが、練習している中でわかって嬉しかった。学生生活の最後にこのような経験ができてよかった。 ・練習中には辛かったりしんどかったりすることもありましたが、毎年最後にはそれを上回る喜びと達成感があります。 ・大変なことももちろんありましたが、とても楽しくて、終わるととても寂しくて、やってよかったなと感じました。 ・練習は中々面倒だったけれど、終わったときの達成感、解放感がとてもよかった。 ・今回は素晴らしい役をいただき、役になりきれて満足している。本番 1 週間前で皆の歌声や演技がぐんとよくなって本番は素晴らしい出来だった。 ・練習は、個人練習と全体練習と拘束時間も多く、しんどいこともありました。本番と本番後の達成感でその思いは吹飛びました。
合唱	<ul style="list-style-type: none"> ・大変だったこともありましたが、先生方や先輩たちと関わりが増えたので、良かったです。また本番当日はお客さまがたくさん来られていて、喜んでくださっていたので、嬉しかったです。 ・院生は学部生と交流する機会がなかなかなかったので、参加することで、音楽講座の一員とすることができた。 ・とても楽しい経験だった (4 件)。 ・初めてオペラに参加できて、すごく色々な刺激をもらえ、いい経験ができました。 ・初めての経験だったので、わからないことも多かったですが、やっていくうちに楽しくなり、本番の様子やお客さまの感想を聞いて、少しでも携われてよかったと思いました。 ・学校内の合唱コンクール以外で、オペラの本番に出ることも初めてで不安もありましたが、本番はとても楽しく、参加して良かったと思っています。
オーケストラ	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しかったし、良い経験になったと思った。 ・最初は嫌だったが、本番終わったってやってみると良かったなと思いました。キャストの人たちは、なんかもう素直にすごいなと思いました。 ・楽譜づくりなど色々な苦労がありましたが、本番はとても楽しめました。 ・普段経験できないことができた。 ・オペラ参加中、よかったと思えたとき、思えなかったときとの波が非常に大きかったが、本番が終わったときの感覚はよかったと思える気持ちが大きかった。 ・自分の思うように演奏できなくてたくさん悩みましたが、

	内容
キャスト	<p>演奏面：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・声の出し方響かせ方などに関して、歌いあげていくうちに徐々に声が伸びやかになってきたような気がする。 ・気持ちを込めて歌っているつもりでも、思ったように表現できていないことが多かったが、本番が近づくにつれ、役の気持ちをもっと理解して歌えるようになったと思う。 ・声色、フレーズ、すべてを考えながら、練習すればするほど歌声が磨かれると身を持って感じた。 ・なかなか自分に自信が持てなかったが、オペラに参加して少し自信が持てた。 ・よく声が固くなりやすく、すぐ咽喉を痛めてしまったが、改善しつつあったのを感じた。 ・オペラに参加したことで、自分の演奏に以前よりも自信が持てるようになりました。技術的にも成長できたように感じる。 ・声が明るくなり、透明感が出たと人から言われました。役柄のせいかもしれません。自身では「人に伝える演奏」を今までより意識できるようになったと思います。 ・初めて声（歌声）に感情を出すにはどうすればよいか考え、挑戦をしました。少しは思いますが、歌声で表現する力も身に付いたのではないかと思います。 ・日本語で歌うことに抵抗があり、咽喉にかかり、何度も咽喉をつぶしてしまった。しかし、参加して先生に役を見ていただいたことで、咽喉にかからなくなり楽に歌えるようになってきた。本番では、楽しく、らくに歌えた。 ・参加する前は、合唱しかしたことがなかったので、前に声をとばす歌い方が掴めていなかったが、オペラに参加することで、自分の役割を踏まえたうえで、お客さんに魅せる演技をするという意識付けができたと思う。 <p>演技面：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初は伯爵夫人のような優雅な役になりきることができるか不安でしかなかったが、オペラの DVD や自分で役について調べることで、より役になりきることができたと思う。 ・自然にかつ分かりやすく動きをつけるのが思っている以上に難しかった。 ・役の衣装を着る前と着た後で、すごく気持ちの切り替えができた。 ・今までは形から入る場合が多かったですが、内から出る感情を意識するようになった。 ・人前で思いついて演技ができるようになりました。 ・おおげさな動きで表現するのではなく、立ち姿や歩き方、内面からにじみ出るものから役を演じることを心がけた。 ・どうすれば母親らしい立ち居振る舞いができるか研究しました。練習が始まってから日常生活でも「お母さんみたい」と言われるようになりました。 ・最初から堂々と演技したつもりでしたが、一つ一つの言葉や意味、表現について考えていくと更に深まり、相手に伝わりやすくなったように思います (ナレーション)。 <p>オペラ制作の経験を通じた変化：</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・衣装をつけてやりはじめたあたりから、役によりなりきることができたように感じる。 ・人生初のオペラだったので、オペラがどのように作られているのかを学ぶことができた。 ・全員で一つのステージを作るということで、本番が近くなるにつれて、皆の意識が高くなるのを感じました。 ・他学年の人の交流が深まった。 ・オペラでは、自分のキャラクターをどう出していくのか、出演者で4回生という立場としてはどのようにオペラに参加すればよいかたくさん考えました。改めて、後輩を大切にしていきたいと思いました。 ・メイクや衣装でなにかこう別人になれた気がする ・大変だという意識が高く、初めは不安ばかりでしたが、本番が近づくにつれてどんどん良い舞台を作ろうという思いに変わってきました。衣装が本当に大きく、役に入るきっかけとなりました。 <p>その他：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今までステージに立つことがあまりなく、慣れていなかったが、今回のオペラをとおして、ステージに立つことにあまり抵抗を感じる事がなくなったように思う。また、このようなステージをやり遂げられたことが大きな自信につながったと思う。 ・全くやったことのない状態から役になりきることを意識することで、ある程度動けるようになった。最初は恥ずかしさがかかなりあったが、多少慣れた。 ・一生懸命取り組む人といふ加減に取り組む人とは、成長の度合いが全く違うなと感じた。 ・大学に入って、何かを大人数と一緒に頑張る機会はなかなかないため、なるべく多くの学生がこのようなオペラに参加するべきだと思いました。 ・キャストに関して、今まで知らなかった性格を知ることができ、練習のたびに成長や変化が見え、私も頑張らなければと思うことができ、とてもいい刺激をたくさんもらえました。 ・協調性の大切さ。あとは皆で一生懸命頑張ることの楽しさ。 ・音楽は素敵だ。 ・オペラは、学生のいまでしかできないものなので、本当にすごく良い経験になったと感じています。演技をつけるのも思っていたよりもすごく楽しかったです。今しかできないことをしっかり取り組むことの大切さを学びました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・不自然にならない演技にしようと、鏡の前で何度か練習しました。 ・表現することの難しさを知った。 ・最初は少し恥ずかしかったですが、自然に少しずつできるようになったと思います。 ・人に見られているということで、笑顔でうたうことを意識して歌えるようになったと思います。 ・だんだん少し笑顔で歌えるようになりました。 <p>オペラ制作の経験を通じた変化：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本番が近づくにつれて、「合唱」という枠割だけでなく、全体の様子を認識することがいかに大切かを知った。 ・本番が近づくにつれて、だんだん目指すものが見えてきたように思う。 ・全体練習の合間に自主練習を組み込んだり、村娘だけで集まって練習したりしました。 ・初めはオペラについて何も知らなかったもので、不安だったけど、先輩や先生のアドバイスもあり、上手くいったので良かったです。 <p>その他：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主体になって動くのがどの学年なのかよくわからない時がありました（リーダーが誰なのか）。幹部がいてその人たちに協力するよう団体が動けばスムーズにいく箇所が増えたのではないかと感じました。 ・本番に向けて、自分のコンディションを作っていくのが、少し難しかったです。本番2週間前に声が出なくなってしまうときは、どうしようかと思いました。 ・オペラに関わる事ができてよかったです。
<p>合唱</p> <p>演奏面：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初めは、とにかく歌うことに必死になってしまっていて、余裕がなかったのですが、本番が近づくにつれて、のびのびと歌えるようになりました。 ・「音程」ということを特に自分の中で重視し、以前よりも正確な音程で歌うことを意識するようになりました。 ・両パートの響きを楽しむことができました。 ・声楽の発声について、ビデオを見たり、声楽専門の先生に尋ねたりして、勉強しました。 ・キャストさんから刺激を受けました。 ・とにかく楽しく歌うことを心がけるようになったと思う。 ・ソプラノとアルトに分かれているので、自分のパートをしっかりとして自信をもって歌えるようになったと思います。 ・途中から合唱への参加だったけど、歌うことができて楽しかったです。 <p>演技面：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・演技は今まで全く経験したことがなかったので、困惑しましたが、とにかく花娘なので、笑顔に気をつけようと思いました。最終的には、自然に笑えるようになりました。 ・歌うことだけでなく、演技をするということがとても難しかったですが、役になりきって行くうちに、とても楽しくなりました。 ・今回初めての経験でしたので、キャストの方々を参考にさせていただいたり、他団体の映像を見て、研究しましたが、変化があったかどうかは自分ではわかりません。 	<p>オーケストラ</p> <p>演奏面：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バランス。楽譜を作ったのもあまりないことで大変だった。 ・最後までよくわからなかったです。センスがないです。 ・アンサンブル能力の必要性をとっても感じました。指揮に合わせて皆が意識を揃えるテンポキープの重要性を感じました。 ・オケの音色が作れてよかった。 ・最初1か月は譜読みにも必死でアンサンブルどころではなかったが、次第にキャストの方が歌いやすくと心がけるようになり、呼吸なども感じるようになった。また、オケが入ったときが最もしんどいと感じた。今まで、キャストと合わせていたものを今度はオケとも合わせなければと今までのギャップと戦った。本番では、オケの音もよく聴けたと感じた。今までアンサンブルの経験が少なかつたため、自信はなかったが、今回のオペラを通して、成長したと思う。 ・練習時間が増えました。オペラ参加前よりは、他人の前で演奏するとき、緊張することが少なくなりました。 ・より厳しく、アンサンブル、音作りについて考え、取り組むようになった。 <p>演技面：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・普段、合唱や吹奏楽などの指揮では、「演技」ということは考えることはないので、演技と合わせて音楽づくりをすることの楽しさと難しさを味わうことができ、大変よい勉強になった。 <p>オペラ制作の経験を通じた変化：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参加決定から練習に入るまでがちょっと長かった気がする。 ・最初は本当に不安ばかりで、ずっと悩んでいましたが、練習をしている度に楽しいと思えるときが増えました。 ・スコア通りのメンバーではなく、現在在籍するメンバーを中心に、最低限度必要な楽器を…という考えで作ったオケ編成であり、無理もあったが、練習を進めていく中でメンバー同士の結びつきも強まり、最終的に、このメンバーとして最善のアンサンブルを作ることができたのではないかと思います。 <p>その他：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歌の人は本当にすごいなあと思った ・オペラを完成させるには、1人ひとりの高い意識が必要だと思いました。

	<ul style="list-style-type: none"> ・指揮者としては「オペラを振ることができてはじめて 1 人前の指揮者」と言われるが、本当に、楽器と歌い手のアンサンブルをまとめるのは難しい。指揮は 100 点満点の点ではなく迷惑をかける場面も多かったが、自分自身の指揮の技量を高める上で、最高の勉強の場を頂くことができ、感謝している。
スタッフ	<p>オペラ制作の経験を通じた変化：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・常に変化していたと思います。対応していくことがとても辛かったです。 ・裏方について何も知らなかったが、大変さや重要さを知ることができた。 ・だんだんと現実から夢の世界ができていくことがすごく楽しかったです。 ・初めの頃は、スタッフとしてどの程度かわればよいのか、どう動けばよいかわからず戸惑いましたが、ステージが出来上がっていくにつれてキャストの方、先生方と協力して動くことができるようになりました。（メーリングリストを使った連絡、期限を決めての作業など） <p>その他：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キャストの方と連絡を取り合うことが大切だと感じた。 ・裏方の仕事はとても楽しかったです。 ・大人教で一つのことを創り上げていくので、どこの作業がどこまでできていて、いつまでできればよいのか、など常に把握しあっていたいかなければならないと感じました。スタッフ兼キャスト（主要な役の方もしくはオペラに詳しい人）がいれば、よりスムーズだったと思います。

③教育学部でのオペラ活動の意義

内容	キャスト	合唱	オケ	スタッフ	計	%
とても良い経験である	10	8	4	3	25	76
まあよい経験である	1	2	3	1	7	21
教員養成学部には不向きである						0
わからない				1	1	3

	内容
キャスト	<ul style="list-style-type: none"> ・オペラのように人数がたくさんいるような表現活動は社会人になってからはなかなか参加する機会がないと思うので、学生のうちにこんな経験ができるのは、岡大教育学部の魅力だと思う。 ・普段経験することのできないことであり、お客さまにも感動を与えることができるため。 ・自分のためになるし、観に来て下さった方々にも夢や楽しみを持って頂ける良い機会だと思います。 ・幅広い分野の経験を積むことができるし、状況、実体を知ることができるから。 ・学生同士で予定を立て、スケジュールを組み、最終的な目標まで目指すということはとても良い経験だと思う ・個人的にも財産となる経験になるし、教育現場に出た際にとても役立つ経験となる。 ・学校教育には「感動体験」が必要だと考えています。教師自身が素晴らしい感動をしたことがなければ、子どもにそれを味わわせてあげることができないと思います。 ・皆で一つのものを作り上げ、独りよがりではない活動というのは、現場で子どもたちにも経験させたいことであるし、自分にとっても経験値を得ることができるから。 ・仲間との協調性。計画して実行するという部分が、授業計画に若干似ている気がする。 ・教員になると、このような経験はめったにできないので、大変貴重な経験になった。 ・附属の子どもたちをよんでの演奏ということで、自分たちのオペラを通して、学ぶだけでなく、まだオペラを見たこ

	<ul style="list-style-type: none"> ・とのないような子どもたちにオペラを知る表現活動を学ぶ機会を与えることができ、非常に有意義な教育活動になったと考える。 ・大学の内にしかこんなに時間をかけて皆でつくっていく機会がない
合唱	<ul style="list-style-type: none"> ・学校現場にはクラスの出し物として劇を行ったりすることもあると思うので、今回のような体験はそういったときに役立つと思います。 ・自身が教員になった際に、生かせる点がたくさんあったため。 ・演奏会の企画や運営は現場で必要な力だと思いますので、とてもよい経験になると思う。 ・声楽の専門ではないのに、舞台に出させていただいて、とても光栄でした。 ・めったにできる経験ではないから。 ・さまざまなことを経験しておくのは、教員になったとき有利だと思うから。 ・今回のオペラのような経験は一生のうちでもなかなかできない経験であるから。音楽の教員になるうえで子どもたちに語れる。 ・学校でオペラ関係の授業をするとき、自分の体験を話すことで子どもにオペラをより身近に感じてもらうことや興味を持ってもらうことにつながる。また、色々な経験をすることは、よいことだと考えるからです。 ・オペラは総合芸術なので、歌唱以外のことを考えるよいきっかけになったし、教員になって子どもを教えるとき、自分自身体験したということはとてもよかったと思います。 ・皆で一つのものを作り上げることは良いことだと思うから。
オーケストラ	<ul style="list-style-type: none"> ・人と人との連携や協力というものはどこに行っても音楽以外でも重要なことだからよい勉強になると思う ・オペラは観る機会はあるけれども、実際に体験する機会はないので、「鑑賞」の教材として取り扱う時により詳しく教えられると思う。 ・学生にとって、演奏、演奏技術の向上につながるもので、学外への音楽教育講座のアピールにもなるので、よい活動だと思う。 ・表現活動するのはいいことだと思います ・学校教育でよくあるクラス演劇や音楽発表会にこういった自分の経験を活かせるのはプラスになる。音大などにはいかならないと思うが、やるのとやらないのでは大きな違いがあると感じた。 ・これから教育活動を行う中では、オペラで学んだことを活かせる機会が多いと考えられるから。 ・学校現場で「オペラ」に取り組む場面はないかもしれないが、ミュージカルや音楽劇に取り組むことはあることで、そういう場面が必要なさまざまな技量を身につけることができる。
スタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・オペラをすること自体は良いと思いますが、練習や準備から本番までの過程を改善していかなければならないと思う。 ・オペラは特に音楽を学んでいる人でないとわからない部分が多く、そこをいかに一般の人にも興味を持たせるかを学べる機会になると思います。 ・勉強になると思います。 ・歌だけでなく、道具だけでなく、すべての要素で表現する活動なので、全体で手を取り合って協力していく力、またその大切さを学ぶことができるから。

④課題（自分自身と全体へ）

	内容
キャスト	<ul style="list-style-type: none"> ・オペラ関係者全体での情報の共有が少なかったように感じる。衣装や小道具など個別に準備するものなども全体で確認して今現在どういう状況なのか確認する機会があってもよかったかなと感じる。

	<ul style="list-style-type: none"> ・役に入りきるのに少し時間がかかったこと。息づかいやフレーズの取り方について。 ・お腹の支え、声の伸び、演技面、見通しを持って行動すること等です。 ・自分自身は、もっと堂々と自信を持って歌うことが課題だと感じた。全体の連携をもっとしっかりやることが全体の課題であると思う。 ・半年間でこの時期までに何かを完成させておくという目安を立てていましたが、結局後半で詰め込んだ印象だった。初期から意識を高めることが大事だと思います。 ・歌手とオーケストラのバランス (2件) ・自分自身 表現力がまだまだ足りません。運営も自分の部署だけでなく他ももっと気にかけることが必要でした。全体 周囲への配慮にやや欠ける。 ・学生主体で創り上げられたらもっといいなと思いました。今回はかなり先生方に頼りっぱなしになってしまい、スケジュールなど学生でもっと創り上げると力になると思いました。 ・歌の技術、響かせる歌い方。 ・自分自身の課題は、演奏面である。咽喉に負担がかかりやすくなるので、これからの課題である。ただ演技面は、演奏面でも自分の自信につながり、精神的にも演奏でも自分の成長につながって良かった。 ・自分自身としては、一人で聴かせることのできる歌唱力がまだ足りないと感じた。テノールとしての音域の狭さにも課題を感じた。全体としては、指摘し合う練習があまりできていなかったのではと感じた。学生リーダーを一人置いたうえで、学生主体でつくり上げていくことも、もう少ししていかなければいけないと思う。 ・より相手に伝わるという点を重視して、これからの演奏にも活かしていくべきだと思った。
合唱	<ul style="list-style-type: none"> ・計画的に練習や準備をしなければならぬと思いました。またアイデアをどんどん出せる発想力豊かな人間になれば良いものはつくれないと思いました。 ・各自の仕事の割り振りや日程を早めに提示されると更によくなると思いました。特に本番当日は、何をすべき時間なのかを自分も含め、全体が把握できればよいと思います。 ・キャストの演技力や歌唱力は、ものすごいなあと思いました。もっともっと勉強しなければと思いました。 ・自分の技術のなさを痛感した。 ・連絡などを早く回してほしい。 ・先々のことを考えて行動する。 ・自分自身は、もっと堂々と開放的に歌うことです。全体としては、あまり深く携わっていないので、よくわかりませんが、歌以外の準備(オケなど)はもう少し早めにしたほうがよいかもしれないと思いました。 ・もっと歌の技術を磨こうと思います。これからもしっかりと頑張ります。 ・皆の予定を聞いて、練習の日を決めること。
オーケストラ	<ul style="list-style-type: none"> ・何もわからなくても先をなるべく見通して、自分のできることをやるのが大事なんだと思った ・それぞれの演奏・演技の技術向上が重要だと思いました。また、オケは、歌とのバランスをよく考えたほうがよいのかと思いました。パート譜を作成する時間ももったいなく、その時間を楽器練習にあてたらよいなと思った ・楽譜の件に関して、完成するのに時間がかかったのが嫌だった。もっと計画的に楽譜づくりを行ってほしかったです ・急な日程決めやキャスト変更は学生に大きな衝撃を与えたと思う。オケと歌の合わせがもう少しあったら、安心できたと思います。ピアノはかなりのギャップがありました。 ・余裕のある演奏をすること。 ・「オペラ」はいうまでもなく総合芸術であり、歌、衣装、背景、大道具、小道具など多くの分野が協力しあってなされるものであり、オケ伴奏で公演を実施する際には、やはり楽器分野や作曲分野の先生の協力を得ることができると、

	さらによいものができるのではないかなと思う。
スタッフ	<ul style="list-style-type: none"> ・小道具の確認(全部揃っているか、揃っていないものは何か)練習予定を1カ月以上前から決定しておくこと ・演技の問題かもしれないが、もっと関係性が演奏者のオーラから見て取れればよかったかなと思いました。 ・段取り、学生リーダーがいると更に良くなると思います。 ・物事を仕切って進めていく力、判断する力、発信する力がまだまだ足りないと感じた。来年から学校現場で必要な力なので、今回のことを活かしてこれから意識していきたい。

⑤次回への参加について

内容	キャスト	合唱	オケ	スタッフ	計	%
ぜひ参加したい	8	2	1	1	12	36
参加したい	2	4	2		8	24
参加したくない				1	1	3
わからない	1	4	4	3	12	36

3. 学生に対するアンケート結果の考察

①参加した印象

参加して「よかった」と感じている学生は88%と高く、キャスト、合唱は全員が満足感を得ている。一方、オーケストラの一部とスタッフの感想に、ややばらつきが見られた。全体的に「楽しかった」「よい経験をした」という回答が多く、取りかかった当初の不安感や大変だという印象が、終演後には達成感や充実感に変化したことがわかる。

②参加前後の自分自身の変化について

キャストの回答からは、「歌声が磨かれた」「声の伸びやかになった」など、自身の発声について上達したと感じていることが読み取れる。また演技面では、各自、DVDを見ながら役の研究に励んだようで、役を演じることを通して自然な動きや演技を身に付けたことがわかる。オペラ制作の過程では衣装やメイクの効果を、ステージを仲間と創り上げる過程では、一体感や意識の高まりを感じている。その他、自分自身に対して「自信のあらわれ」や「確かな成長」を感じとっており、大人数で取り組むことや協調性の大切さについても、身をもって実感したようである。

合唱は、声楽未経験の学生が多く、不安材料を抱えた出発であったが、練習を積むことで徐々に歌うことを楽しめるようになり、自信を持てるようになっている。演技面では、恥ずかしさや難しさを感じていた初期から笑顔で歌えるように変化した学生が多い。制作過程では、本番が近付くにつれて、合唱の枠に捉われず、オペラ全体を見通せるように変化したことがわかる。

オーケストラの回答からは、歌手とのバランスやアンサンブルの大切さをより感じるようになっていくことが読み取れる。制作過程では、練習日程やオーケストラ編成の不安感が楽しさやアンサンブル

力の向上へと変化している。スタッフは、裏方の大変さや戸惑いから、舞台が完成に近づくにつれ、徐々に楽しさを感じるようになっていく。また、スタッフがスムーズに動くためには、キャストや教員との協力が必要だとの思いももったようである。

③教員養成でのオペラ活動の意義について

良い経験であると感じた学生は全体の97%で、大半の学生が活動の意義を共有していることがわかる。学生たちが回答した意見は、部門を越えて、ほぼ次の2点に集約できた。一つめは、「経験の重要性」である。オペラのような総合的且つ横断的な分野の経験は、教育現場で活用できると考える学生が多かった。二つめは、「自己省察への言及」である。多くの人数が関わる表現活動に携わることで、自らの協調性や自主性を伸ばすことができたと考えており、今回のオペラ出演で学生たち自身が得たモノやコトは、予想以上に大きかったといえるだろう。

④課題について

キャストや合唱、オーケストラの回答からは、自身の発声や演奏技術やアンサンブルの力をさらに伸ばしたいという意見が多くみられた。一方、全部門を通して「各部門の学生同士の連携が十分ではなかった」という反省が、共通して見られた。さらにオーケストラのパート譜の遅れや、本番一週間前でもスコアや小道具が揃わなかった等、全体練習での混乱に関する意見もみられた。前もって準備するだけでなく関係者全員が共有することの重要性や、諸伝達の徹底についても、多くの学生が課題であるとして述べている。今後は、スケジュール管理をはじめ、学生主体の展開ができるよう学生リーダーを中心とした体制づくりが必要である。

⑤次回への参加について

全部門を通して、「次回も参加したい」という回答は60%、「参加したくない」や「わからない」という回答は約40%であった。前者は、キャストが大半を占めている。後者の意見は、オーケストラ、合唱、スタッフが多かった。キャストを演じた大半の学生は、入学後、声楽の勉強を2年以上経験しているが、合唱には、声楽経験の浅い初心者も存在しており、表現活動への自信の無さがこうした回答と結びついたのかもしれない。さらに「④ 課題について」で述べた、準備の遅れや混乱等との関連も指摘できるだろう。いずれにしても、次回への参加について慎重な態度をみせた学生が予想以上に多かった。これは、私たち教員が、別途検討すべき課題と思われる。

4. 学生オペラに参加経験のある学生の意見

「学生へのアンケート調査」とは別に、これまで学生オペラに参加経験のある在学生2名に対して、①オペラハイライトを3名の教員の指導体制で行った点と、②運営面の2点について、感想を含めた聞き取り調査をおこなった。この2名は、これまで声楽指導者が一人で担当・運営してきたオペラ・ミュージカルに参加している。

①3名の指導体制について

良かった点

- ・心強く精神的に安心して練習に取り組むことができた。
- ・練習も3人の先生方が見てくださることで、さまざまな視点から見た指導やアドバイスを受けることができた。
- ・学生への負担がかなり少なかったため、自分たちの練習だけに集中することができた。

反省点

- ・自分たちで考えて行動するという機会が少なかったため、以前のような学生が主体となって行うという雰囲気が弱かった。
- ・先生方に頼り過ぎた面がある。

②運営面について

良かった点

- ・7月に練習を始めた時点から、本番までの計画が綿密に立てられていたため見通しを持ちながら余裕を持って練習に取り組むことができた。
- ・今回は参加している学生が多かったため、キャスト・合唱・オーケストラ・スタッフと、部署がはっきり分かれていたことがよかった
- ・練習の出欠についても、インベグ一人で全体を把握するよりも、今回のように各部署で確認したほうが効率良い。
- ・キャストが運営にも関わるとき、一番ストレスなのが、運営の仕事で自分の演奏に集中できないことである。今回は、搬入・搬出関連もスタッフにやっていただけて、本当に助かった。

反省点

- ・スタッフの方が小道具を全て用意するという点で、スタッフにどんな小道具がどんなときに必要ということが伝わっていなかった。そのため、なかなか小道具がそろわず、キャストも勝手に用意していいものなのかかわからず、本番一週間前になっても小道具がそろってないという状態だった。スタッフもどう動けばいいのか十分に把握できておらず、混乱して

いる様子だった。

- ・キャスト一人ひとりに担当のスタッフをつけることは、今回は全く機能していなかった。
- ・演技をキャストとスタッフが一緒に考えることは、必要なかったのではないか。
- ・各部署が独立し過ぎていて全体の状態を把握しにくい。特に顕著だったのが、衣装と小道具である。これまで衣装も小道具も基本的にはキャストが自分で用意していたため、スタッフにどこまで任せていいのか分からなかった。当初、キャスト一人ひとりに合唱隊から担当をつけるという話で、実際分担もされたにも関わらず、結局ほとんど機能していなかったように思う。合唱やオーケストラの練習は進んでいるのか、スタッフは今どういう仕事をしているのか、もう少し各部署が連携をとりながら、お互いの状況を把握できていれば良かったと思う。

改善案

- ・今後も今年と同じ規模でやっていくのであれば、単なる名簿ではなく、組織図を作って、仕事もリストアップしたほうが良いと思う。
- ・キャストも一緒に大道具や小道具の準備をすることが必要。スタッフの方たちだけでは何がいつ必要なのかということ、把握しづらいため、キャストと一緒に連携を図りながら進めていった方が良いのではないかと思った。
- ・オペラの責任者と学生運営委員会がもっと連携することが必要。この問題は、ずっと感じてきた課題である。オペラが定期演奏会の中のひとつの演目であるという意識が薄い。学生運営委員会もオペラ参加者も舞台運営をしていくにあたって、学生運営委員会との協力と相互理解は不可欠だと思う。
- ・学部3年生のキャストに、もっと運営に関わる必要がある。そうしないと、4年生に進級した際、中心となって運営を行うことができないと思う。しっかり運営に関わって、舞台構成の諸要素を知ることができるのも、オペラやミュージカルの良い所だと思う。裏方の部分まで知ってこそ、本当の達成感や喜びが味わえるのではないのでしょうか。

上記の感想に見られるように、3名の教員による指導体制によって、学生が安心感を持ってオペラに集中できたことは、大変良かったのではないかとと思われる。一方、改善すべき点として、運営に関する重要な意見を収集することができた。オペラ参加学生の部門間での連携不足の解消や運営委員会とオペラ

との関わりを密にすること、3年生のオペラ運営面への参加等についても、これまで「学生オペラ」に参加経験がある学生ならではの、貴重な意見である。いずれも学生オペラ継続のうえで、学生が主体的に検討すべき点であるが、同時に、私たち教員が支援すべき課題でもあろう。

Ⅲ 指導者に対するアンケート調査

次に、3名の指導者に対しておこなったアンケート調査について述べる。質問項目は、以下の通りである。

■オペラハイライト「フィガロの結婚」制作に取り組まれて、感じられたことをご記入ください。	
教員名()
1. 参加した学生の変化について	
2. 先生ご自身の変化について	
3. 教員養成における学生オペラについて	
4. 今後の課題など	
5. その他 ご意見がありましたら自由にご記入ください。	

1. アンケート調査の結果

①参加した学生の変化について

キャスト・合唱：

・取り組む意欲、演奏レベル、協力体制は徐々に向上していき様子が見られた。キャストの中には、声楽が専門でない学生やこのような集団の創作活動の経験が不足している学生も存在し、キャストの集団になかなか入り込めない、練習日程を組む際の協力体制など、難しい場面が多数見られたが、本番が近づくにつれ、まとまって行く様子が見られた(虫明)。

・最初は自信のなさや迷い等が表現に表れていたが、練習を重ねるにつれ、自分自身の表現の方法を探求しようとしている様子が見られるようになったと思います。それによって、表現力も豊かになり、自信につながっていったように感じます(早川)。

・キャスト…配役が決まった時点から、役づくりにコツコツはげむタイプと、本番1ヶ月前に、いきなり上手になるタイプの2種類があるなあと思いました。でも、どちらのタイプであっても、「自分のピーク」を本番にあわせて調整していました。さすがです。村娘…自分たちの役が明確になったのは、夏休み頃からです。練習を重ねながら、じわじわと上手になっていきました。(小川)。

オーケストラ：

・指揮者は博士課程3年、楽器編成は1年生4名、2

年生2名、3年生1名、卒業生1名、外部賛助2名の小編成であった。結成から本番まで、練習計画が立てられず、直前で楽器1名の交替があるなど、技術面、意識の不足、オペラの音楽を引っ張って行く大切な部門であることの認識が甘かったのではないかと考える。これは、上級生が少なく演奏技術が不安定であったこと、責任者の学生がオーケストラをまとめ、いい音楽を目指していく意気が薄かったこと、オーケストラのパート譜が2幕以降遅くなったこと、練習不足など、さまざまな原因が重なっている。本番は何とか大きな事故もなく乗り切ったが、学生自身には演奏や運営面では不満が残ったのではないかと（虫明）。

・賛助の方々とのコラボが、学生には「よい演奏をしなければ・・・」という良い影響を与え、意識が高まったように感じます（早川）。

スタッフ：

・今回、演出や台本の内容の把握が遅くなり、舞台小道具、大道具が必要な時期に、ほとんど揃わない状態であった。そのため、スタッフの学生自身が不安感を持って、練習に参加し、指導者側からの注意を受けるといふあまりよくない状況が続いた。キャスト、スタッフ、教員側との密な連携の不足だったのではないかと（虫明）。

・後半は、スタッフを頼りに仕事を任せるといふ方向にもっていくことによって、前向きに動いてくれるようになったと思います（早川）。

②指導者自身の変化について

・これまでの一人で学生オペラを創り上げるという重責を3名で分担し、それぞれの教員の特性を充分に発揮できた演奏会であった。言い換えれば、オペラのような総合的な要素を含む芸術は、今回のように声楽以外の教員も加わることによって、可能性を拡大、新しいアイデアを導入できる大きなきっかけとなったと感じた（虫明）。

・声楽が専門でない身にとって、どのように関わって（役だって）いけるのか心配がありましたが、何より一つの音楽を学生と一緒に作っていくことの勉強を改めてすることができたように感じています。単に歌唱の指導だけでなく、精神的な面の支えや練習計画、事務的な準備、オーケストラのこと、スタッフのこと、演出のこと、道具等のこと、賛助への配慮等々・・・本当に多くのことに意識を向ける必要があり、その指導や準備の過程は大変であることを、まさに実感しました。本当に私自身が勉強になりました。また、

声楽の専門家（オペラ経験者）がいてこそできる取り組みであり、専門の違う教員の連携は必要であるとあらためて思いました（早川）。

・背景づくり、大道具・小道具の工夫、幕間やシーンのつなぎの工夫、台本作成、演出サポートなど、さまざまな仕事に携わりました。すべてが初めての内容でしたので、オペラ演出に関する基礎的な知識を勉強しつつ、本番に向けて段取りを構築するという、スリリングな体験でした。序曲を聴き比べることはもちろん、これまで演出家によってどのような工夫が、どのようになされてきたのかを知るため、数種類のオペラ《フィガロの結婚》を見比べました。演出に関する本も数冊読み、また、発声指導のテレビやビデオも積極的に視聴しました。これまで関わってこなかった分野であったため、こうした「泥縄式」の勉強であっても大変役に立ったと思っております。これらすべてのことが、私の「変化」と言えるでしょう（小川）。

③教員養成における学生オペラについて

・学生のオペラ活動は、音楽大学や芸術大学では、定期的に開催されている。その場では、プロの演出家や指揮者のもと、プロを目指す学生たちがしのぎを削り、オペラの本語上演に向けて、コレペティで研鑽し、指揮者、演出家の指導を受け、本番直前の数回でオーケストラ練習と合同し、ゲネプロ、本番に臨む。衣装、舞台装置、照明、メイクなどは、外部業者に委託する機会が多い。教員養成の学生オペラの意義を上げるとすれば、まず、音楽芸術のプロでなく、教員のプロを目指している学生が活動していることである。とはいえ、学外で演奏し、聴衆が存在するからには、教員養成であるから演奏レベルが低くてもよいということにはならない。また、舞台の大道具、小道具、演出など、学生自身が考えて、制作していく過程も重要である。それぞれの部門の学生たちが最大限の努力をしていく過程は、教員養成でしかできないことであろう。これらの体験は、将来教員になったときに、活かされていくことになる。ただ、学生サイドから見れば、キャストに注目度が高く、スタッフやオーケストラは補助的なものという意識が強いと感じられる。理想的には、これらの部門すべてを経験することも必要であろう。全員で創り上げるものだという意識や一人ひとりの満足感をさらにアップさせていくための方策は熟慮していかなければならないであろう（虫明）。

・このような経験は、卒業してからは本当にできない

と思います。単に歌唱能力や表現力を高める問題だけでなく、またその指導法の勉強だけでなく、人と人との関わりの中で、どのように音楽を作り上げていくのか、さらには、自分自身の人間の成長につながる取り組みであると思います。(2)で前述したように、背後にはさまざまな準備や配慮などが必要で、そこに意識が行き届くかどうか大切です。教員養成にはそれがとても必要なことであり、この取り組みはその視点からも意義あるものと思います(早川)。

・音大であれば、自分たちの技量をアピールすることに主眼をおいたでしょう。あるいは、イタリア語(日本語字幕)にこだわったり、オーケストラの質を高めることに重きをおいたりしたでしょう。しかし教育学部だからこそ、観客⇄舞台の交流を何よりも重視できました。来場されたお客さま達に楽しんでいただくこと、オペラって面白いね、素敵だねという親近感を持ってもらうこと、この目的は、教員養成を主目的としている教育学部でなければ達成できなかったと思います(小川)。

2. 各教員の見出した今後の課題

教員(指導者)を対象にしたアンケートからは、オペラへの取り組みの成果として、学生の成長が見てとれたこと、また、各教員自身の変化・成長にもつながったこと、そして内容学と教科教育の各分野の教員が協力することによって得られた教育的意義について、確認できた。

一方で、いくつかの課題も明らかとなった。それぞれの教員が見出した課題の内容を、次にまとめる。

・今回のオペラハイライトに対して、学生同士の連携不足を感じた。分野別に仕事を担当させ、本番までどのように学生たちが進行させていくかという点で、指導者側の意図が学生たちにはスムーズに伝わらなかったのではないかと。例えば、学生にハイライトシーンを選択させ、小道具や衣装をキャストに配属して考えさせるというワークを課したのであるが、本番1週間前でも衣装や小道具が準備できていないという状況が見られた。オペラ未経験の学生には困難な作業だったと察せられるが、キャストと担当学生との連携が計れなかったことが大きいと思われる。また、キャストにも同じように、期限付きで歌唱や演技を完成させるような指導を行ったが、個々の歌唱技術に差があり、咽喉を痛めかけた学生や発声を崩した学生も見られたことから、本番に向けての仕上がりが

や進捗は、少しずつ浸透させ、気持ちや能力を熟成させる期間が必要であると再確認した(虫明)。

・学生オペラをやりやすい環境に整えることが必要です。発表場所、予算など、物理的な支援をどのように得ていくのか。また、大学の取り組みとして広げるには、どのように周りと連携すればいいのか…など(早川)。

・来年度以降の進め方について、音楽教室講座として考えなければならないと思っています。毎年開催するのか、それとも数年おきに開催するのか、規模をどうするか、演目をどうするか等、継続の仕方が課題だと思います(小川)。

IV まとめと今後の課題

以上、本稿では「学生オペラ」に関わった学生と教員(指導者)を対象に実施したアンケート調査、及びオペラの参加経験のある学生への聞き取り調査結果をもとに考察した。学生たちは、オペラに出演することによって、自身の音楽的な成長だけでなく、学生同士の連携の必要性を強く感じ取ったようである。志を同じくする仲間と一致団結して、一つの目標に立ち向かったことは、連帯感を強め、集団の絆を深めるためにも有意義であったといえよう。一方、指導者らは、音楽教育のさまざまな視点から、学生の意識や表現力を誘発し、育てていくことが重要であることを再認識した。これらの内的評価から見ても、全体としては「学生オペラ」を成功裏に終えることができたといえる。

最後に、学生オペラの今後の課題を以下の6項目にまとめる。

1. 音楽教育講座としての、学生オペラの位置づけ。
2. 照明・衣装・小道具・大道具などの、オペラに係る諸経費の捻出。
3. 関係者全員を対象とした全体練習や、個別の練習日程の組み方。
4. オペラの責任者と学生運営委員会との連携、学生同士の連携など、スムーズな運営のための方策。
5. 学生が主体となる体制づくり。
6. オペラに関心のある学生への呼びかけ、及び他専攻の学生確保と音楽指導。

こうしたさまざまな課題の解決に向け、教員だけでなく学生と共に協議・検討しながら、より良い改善方を考えていきたい。

Leading Cultural Activity through Student Opera (2)

: Analysis of the Internal Evaluation of a Teacher and Student

Masako MUSHIAKI (Graduate School of Education, Okayama University)

Yoko OGAWA (Graduate School of Education, Okayama University)

Rinko HAYAKAWA (Graduate School of Education, Okayama University)

We carried out a “Student Opera” , as a cultural activity aimed at community improvement and human resource development, in which Okayama University students could play an active part on an educational front. The purpose of this paper that followed by “Leading Cultural Activity through Student Opera (1)” was to discuss the importance of leading innovation through music and to analyze internal evaluations using questionnaires. The questionnaire results for the university students show that 88% students were very satisfied and 97% students felt their opera as a good experience. Most students shared the significance of their activity and also considered the actual meaning of independence, self-esteem, and collaboration. Some of them pointed out several difficulties related to the cooperation with fellows. Findings of the present paper suggest that we shall cultivate and observe more carefully the future of “Student Opera” .

Key-words: student opera, human resource development, various cooperation, leading cultural activity, internal evaluation
